

“福祉”から“救済”へ

現代人に救いを与えてくれるのは自然であり、犬や猫であり、遊びでもあり、そう考えると今の福祉の考え方はあまりにスケールが小さい。これを「救済」という広い土俵にのせてみたらどうか。



一人暮らしのK子さんに、身の回りであなただの癒しになっているものは何かと聞いたら、これだけ出てきた。それらを自分の周囲に配しているのだ。

この中で特に彼女が力を入れているのがボランティア。5つのグループに属して、仲間からも信頼されている。これが救済に繋がっているらしい。(次頁参照)

<試作>私の癒しの素—その実態と効果分析 (表紙のK子さん)

畑仕事	家	ペット	手毬	近所の子供	警察官の弟	ボランティア活動	写経	カラフルな物	これらの総体が「救済」
体力づくりも兼ねている	小修理	朝の犬の散歩が苦痛に	無理せずにやっている	たまに遊びに来る	時々見回りに来る。 防犯効果	5グループ世代間交流 社会に貢献	無理せずにやっている		
福祉効果	癒し効果	癒し効果	癒し効果	癒し効果	癒し効果 福祉効果	癒し効果 福祉効果	心を鎮める効果		
作業を少し減らす?		通ってくる弟に頼む?				数を少し減らす?		色の配置を考え直す時	

<自己評価>

- (1)少し欲張り過ぎかも。体力づくりは福祉効果だが、逆に体力を消耗している面も。
- (2)活動内容を再考して数を減らす工夫も。ボランティアも5つから少し減らす。
- (3)癒し効果のあるものがそれぞれどのような効果が出ているのか、研究してみたらどうか。

<今後の取り組み>

- (1)ところで「見守り」の効果はどうか。この中のどれがどの程度、見守りに効果が出ているのか。
- (2)今後要介護になっていく場合、支えてくれる人材は誰と誰なのか、自助エリアとご近所エリアに人材をのせてみよう。

「救済」とは何か？－本書との関連で

救済の主役・対象	<ul style="list-style-type: none">■救済の主役はいない。救済の対象も同様。というより、森羅万象、あらゆるものが救済という現象に巻き込まれているというべきか。■巻き込まれた中には自然も、だから動植物も空気も含まれる。人間もいるが、それも森羅万象の1つにすぎない。■本書の「担い手にも受け手にもなれる」は、「巻き込まれた」場合の行為のことを言う。また「受け手の役割を果たす」のも同様。つまり森羅万象の救済に巻き込まれた場合の人間が果たすべき役割を「練習」しておこうということ。
救済の内容	<ul style="list-style-type: none">■求める救済の中身は本人の主観による。その時本人は何をもって救済と捉えるかによる。■人間以外の場合も、ある種の意思が、救済が働いたことを自覚することもありうる。■人間の場合、人によって超高度な資源を欲求する場合もあり、これも自己救済の対象になる。
救済の実施	<ul style="list-style-type: none">■本人が自分向けにつくって、自分で消費する。本書で言う「自己福祉」はこのことを指す。作るのではなく、ただ消費ということもある。■本書の「同盟」は共通の資源を共同で確保する場合のこと。「助けられ上手」は仲間のためにまとめて資源を確保する場合。

究極のところ、
自分の問題は自分でないとわからない。
問題の解決策も自分でないとわからない。
だから自分の手で解決するよりほかない。
究極の福祉はだから、自己福祉となる。



シニアカーで畑へ (次頁)

1.“自己福祉”

福祉は本人による、本人のための活動から始まる

他人のためばかりでなく、自分のための活動も福祉だ。

(1)毎晩銭湯に来て客の服を畳む認知症の女性

自分の心を癒すためか…。その方法を自分で見つけた。

番台の人も客もこれを理解して協力。彼女専用のデイサービスセンターだ。

(2)夢中でお楽しみ事をやっていたら問題が消えた！

①自身の問題と直接関係ない②お楽しみを③夢中ですると、④問題が解決する場合も。

(3)事例

★半身不随の男性が「畑に行きたい」と必死に出かけていくうちに元気に。次頁解説

★引きこもりの認知症の人が、好きな踊り教室を開催することで引きこもりが消えた。

★精神障害の女性が「自宅では電磁波が出るので寝られない」と外で寝ていて凍傷になったが、治療を拒否。ところが書いている詩を褒めたら心を開いて、はりきって詩を書いて見せてくれるようになり、入院も施設入所も承諾。

(1)「お楽しみ」の基本構図

- ①「私が抱える問題」。②次が、本人が見つけだした自分用の癒しの素。③お楽しみの障害・不足しているものは何か、④また支援者は誰か。
⑤癒しの素で思い切り楽しもう。これで通常の何倍かの癒し効果が発揮される。⑥抱えていた問題は改善したか。

<事例>農家の人が半身不随に。認知症も。でも「ワシは畑に行きたいんじゃ！」

何度も転びながら通っていたが、シニアカーを手に入れて解決。沿道の人の見守りで農業再開。家人が知らぬ間に中国人とも仲良しになり、畑を貸したり、耕作を教わったり。



2.“助け合い”から“同盟”へ

共通の福祉資源を求めてご近所で協力し合う

(1)助け合いと同盟の違い

次頁のマップ。庭木の剪定に困った一人暮らしの高齢女性たち。1人が定年退職後に剪定技術を習得した人材を見つけて依頼した。これを知った他の人も「私も」「私も」と殺到。

「人材の情報は提供するけど、あとは各自で交渉する」のが彼女たちのやり方だ。

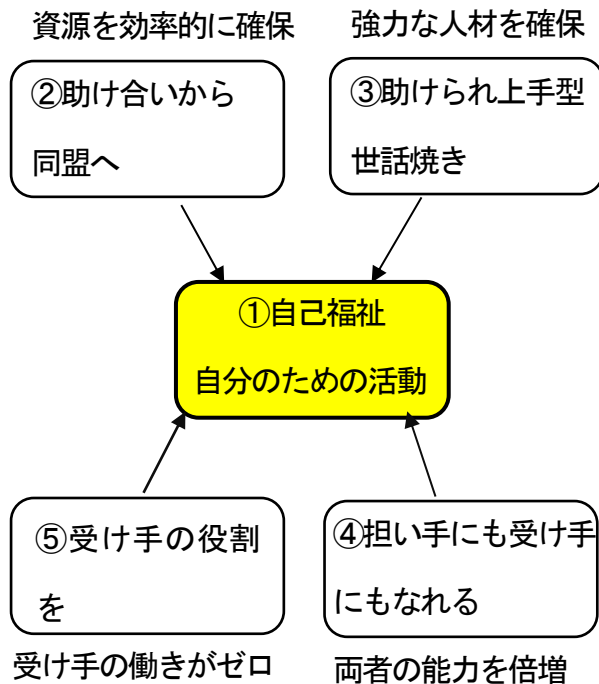
互いに要援護だから直接やってあげられることは少ないが、共通の福祉資源を確保するために協力し合うことはできる。

(2)先輩の開拓したやり方をいただき合う

車のない一人暮らしの女性がどうやって買い物をするのか。5つの選択肢があった。困った人は経験者に聞きながら、自分に合った方法を考えているのだろう。緩やかな同盟。

(3)足元に「自助エリア」(安心地帯)をつくる

一人暮らし高齢者は大抵、自宅周辺に「自助エリア」をつくる。10~20世帯の中に見守ってくれる人、生活支援をしてくれる人などを配して、上手に活用する。



自己福祉活動の発展段階

① 銭湯で客の服をたたむ（自
助エリア・自宅周辺）

② 夢中で楽しみ事をしたら
問題が消えた（ご近所）

③ ご近所で仲間と同盟
（ご近所）

④ 助けられ上手型世話焼き
（自治区・校区）

⑤ 受け手の役割を果たす
（自治区・校区）

3. 助けられ上手型・世話焼き

助けられ上手と助け上手を兼ね備えた二刀流型

超高齢社会を担う世代に助けられ上手にもなれる当事者意識のある人が育っていないか。

地域で活躍した世話焼きさんが高齢になり、当事者意識に目覚めた時が活動のチャンス。

(1) 「ご近所でのシニア男性の送迎ネット」を成功させた腕前

上田豊美さん（75）は、体の大柄な要介護の夫を病院まで連れていくのに、ご町内を活用。ご近所さんとの旅行に要介護の夫も連れていき、そこで介護の話をしたり交流をして、ご近所の男性たちによる送迎ネットを作った。**上田さんの助けられ上手の腕は次頁に紹介。**

(2) 要介護3の妻と癌の夫という夫婦に自宅開放のサロン開催を提案

介護支援NPO「すずの会」は、施設入所を拒否するこのA子さん夫婦にサロン開催を提案。NPOのメンバーが支援するが、鬱に悩むご近所のTさんにも「A子さんのサロンの手伝ってあげてね」。逆にA子さんには「Tさんのことをよろしくね」。サロンのホストとして活動しながら、さらに当事者同士がお互いに支える側になることで治療効果が上がった。担当医がA子さんの要介護度が下がっているのに仰天。「あんたたち、何をしたんだ？」
高齢新世代の、当事者力も含めた両刀面の力を持つ世話焼きさんの凄さを垣間見た。

超高齢時代の助け合い社会に求められる「助けられ上手」という新技術



助けられ上手の要件	上田豊美さん（75歳・大阪府太子町）の助けられの自己評価
①問題をオープンにできる	夫の介護のこともご近所の人と共有した。
②困った時助けてと言える	何かあった時にはすぐに相談できる相手をご近所に数名いる。
③自分なりの方法でお礼やお返しができる	お返しやおすそ分けをする時は、相手の好みも聞く。いまではご近所の好みはある程度把握できているので、外出したとき、相手の顔を思い浮かべながら買い物をする。 自分にできることは、運転のおすそわけ。車の運転ができる間は、ご近所の人を送迎を助け合いです。車のない人の送迎や買い物と一緒にいたりする。 話をすること。人を楽しい気持ちにさせたり明るくさせたりすることができる。
④担い手を探し出せる	足が不自由なので、旅行に行くときは腕を貸してもらおう。
⑤担い手にやる気を与える	自分でできる事でも、声をかけてもらったときは相手の好意に甘える（あえて断らない）こともある。
⑥自分も活動に参加する	車の運転ができる間は、ご近所を送迎を助け合いです。車のない人の送迎や買い物と一緒に行く。
⑦担い手が取り組みやすい方法を工夫する	担い手の負担をできるだけ分散するように意識している。 腕を借りる時、同じ男性ばかりだと誤解を招くかもしれないので、毎回違う男性にお願いしている。

4.担い手にも受け手にもなれる

担い手と受け手の区別をなくそう

今の福祉はあらゆる場で担い手と受け手がきちんと区別されている。

だが担い手が自分の問題も一緒に解決してもらいたがっている、受け手も担い手として相手の問題解決に協力してあげたがっているとしたら、どうなるか。

(1)世話焼きさんが特養ホームに入所し、地域が困ってしまった。そこで…

定期的に里帰りし、中堅の世話焼きさんの指導と要介護者のお世話をすることになった。

こんな活動的な入所者のために、活動先で宿泊したり、活動のサポーターを配置するなどが必要。施設というあり方自体に無理がある。いずれは各自自由な生活ができる施設に。



(2)施設入所の夫婦の里帰りを、重度で一人暮らしの要介護者が受け入れ。

夫婦は久しぶりに地域で宿泊でき、受け入れた要介護者も手を貸してもらったりできる。このように双方が一緒に生活することでいろいろな利益のある関係を探せば、見つかるはず。里帰りという発想には、地域での多様な「共生」のパターンがあるのではないかと。

担い手と受け手という区別が厳しい所にこそ、「共生」のチャンスが生まれるかもしれない。

(写真・手前右が里帰りを受け入れる半身不随の女性。手前左が里帰りの女性。後方が民生委員)



一人暮らしの山崎さんが心掛けていること

- ①困った時には、ご近所に助けを求める
- ②頂き物は、お返しを忘れない。
- ③不在の時は自分の居場所を明らかにしている。
- ④見守られているが、私も見守りに参加する。
- ⑤自治会の役割を果たす。
- ⑥民生委員さん等との連絡を保つ。
- ⑦ご近所さんとのおつきあいは欠かさない。



山崎さんの解説は、次頁

5.受け手の役割を果たす

福祉には担い手と受け手の協力が必要。今受け手の働きはゼロ

担い手と受け手は協力し合うということだから、施設事業は共同作業となる。

今は受け手はただサービスを待つだけで、受け手の役割が全く果たされていない。

(1)あるデイサービスセンターは、デイが終わったら地域のサロンに合流する

あるふれあいサロン。これからデイサービスが終わると、その後一斉に利用者が参加してくるので、それを待っているという。デイサービス利用者と地域のサロングループの話し合いによって、こんな自主的な事業が始まった。(左上の写真)

(2)施設の認知症の人が、在宅の認知症の人を訪問

当初は職員の仕事だったが、せっかく認知症の人を訪問するのなら、施設の入所者を同道しようとなった。訪問先で両者の会話が始まる。在宅の人が愚痴をこぼすと、入所者が「あなたはまだいい。私なんて施設に入れられちゃった」などと慰める。そうやっているうちに症状が改善したという。それならばと、その後は症状の重い人を優先して連れ出すことになった。

■前頁の山崎さんが心掛けていること

山崎睦男さん（写真左）が宮崎県社会福祉協議会の事務局長だったときに、彼のお母さん（写真右・一人暮らし）についてまとめてもらったことがある。彼女のやっていることで注目すべきものがこれだけあった。

「見守られているけど、私も見守りに参加する」というくだりがあるが、人間というものは面白いもので、普通は自分が福祉の対象者と位置付けられると、素直にそれに従ってしまう。私は見守られる側なのだ決めてしまったら、「私だって見守りぐらいできるわよ」とはなかなか思い浮かばないものなのだ。

★助けられる側の標準的な役割メニュー

＜第1段階＞①自分の問題をオープンに。②助け手を確保する。③助けを求める。④支援のお礼をする。⑤支援のお返しをする。⑥当事者同士で助け合う。

＜第2段階＞①担い手が活動し易いように工夫する。②担い手に支援の仕方を教える。③担い手の支援活動に自分も参加する。④自分の支援用の会議を開く。⑤自分の支援ネットをつくる。⑥担い手と一緒に学習する。

★デイサービス利用者が担うべきこと

①利用者同士で助け合い。②スタッフの仕事を代行する。③サービスを利用者の自主活動へ移行。④利用しない日の過ごし方で利用者同士が協力。⑤サロンや趣味活動に皆で参加する。⑥デイのあり方を利用者が提案。⑦デイを利用せず、自主的なデイを目指す。

★施設入所者が担うべきこと

①入所者同士で助け合い。②スタッフの仕事を代行する。③サービスを入所者の助け合い活動に。④入所者として地域に貢献する。⑤地域のサロンや趣味活動に参加する。⑥施設のあり方を関係機関に提案。⑦自宅復帰の可能性を探る。⑧里帰りグループをつくり、助け合い。